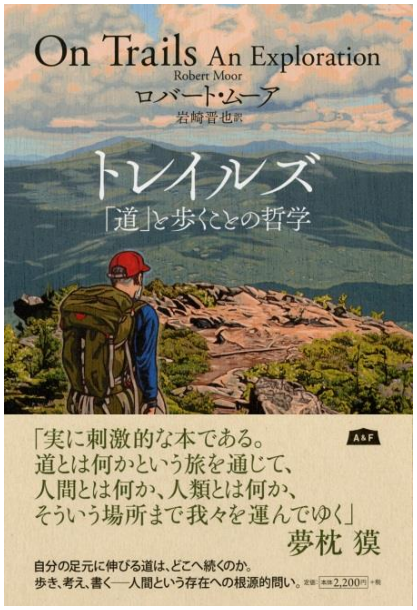
R．ムーア著『トレイルズ～「道」と歩くことの哲学』



大法螺大センセイ夢枕獏の腰巻評論に騙されて買ってしまったが、大先生ほどの知性も教養も無い小生には深い原生林の文字どうりのロングトレイルに紛れ込んでしまってロストポジション、今いる場所も進むべき目標も、はたまたエスケープ・ルートも全くの五里霧中。途中で何が何やら訳も分からなくなる著者の主張やストーリー展開、加えて煩瑣な訳文に八つ当たりの悪態をつきながら挙句の果てに本を投げ出して不貞寝をする始末。

しかし、それでいて何か引っ掛るものがあって、投げ出した本をまたスゴスゴと拾い上げて、この先に何か面白いトピックスが待っているのではなかろうか、終着点ではどのようなドラマが待っているのだろうかと期待しつつ読み始めるのだが（本当は大枚？を叩いて買った本をツンドク状態にしておくのが勿体ないという貧乏根性)、ものの 10 頁も進まない内にまたまた悪態をつきながら不貞寝ということの繰り返しをやった末に、すっきり完歩という訳にはいかなかったが何となく著者の膨大な蘊蓄の先が見える感じがしてきたという次第である。

さて、ロングトレイルといえば、日本では平安時代の昔から熊野古道や四国遍路などがあった。近年では、信越トレイルや十勝ロングトレイルなど各地でのトレイルの設定が進められているが、残念ながらトレイルの距離が短いのは否めない（各地を繋いだ日本列島縦断トレイル計画もあるそうだが・・)。

そのような訳で本邦ではロングトレイルという分野は未だ未定着なのかもしれないが、世界ではヨーロッパのツール・ド・モンブラン、ヒマラヤのアンナプルナ・サーキット、ニュージランドのミルフォード・トラックなどが古くから歩かれており、特にアメリカではシェラネバダ山脈を縦貫するジョン・ミューア・トレイルが古典的な名声を博しているし、また最近では北米大西洋側を南から北に 3,500km もの長距離を貫いているアパラチアン・トレイルが大人気になっているらしい。そもそもトレイルと言えば、アフリカで誕生した人類が 700 万年という気が遠くなるような時間を掛けて世界中に拡散していった人類の旅路 5 万キロこそがその原点ではなかろうか（関野吉晴著『グレートジャーニー』参照)。

さて本題。本書の著者はアパラチアン・トレイルを一気通貫で歩いた体験からトレイルの成り立ちに興味を持ち、6 億年ほど前の得体の分からない地球最古の生物が海底を這い回った痕が化石で残っている痕跡（これもトレイル）を観察して生物は何故動き回るようになったのか、続いて蟻や昆虫が行列をなして行き交う道はどのような情報メカニズムで創られているのか、また、ゾウやバイソンなどの四足動物が移動している広大な獣道は彼ら四足にとってどのような意味を持っているのかなどから始め、獣を追って民族大移動を行なってきた古代人類がこの地球上にどのようにして道とネットワークを張り巡らせ、その結果、知恵や言語や伝承などという文化をどのように織り上げてきたのか、また近代の高速道路網などの開発と原野を資本主義に売り渡したことによって、かってのトレイルとそこを利用していた人びとがどのように変容していったのかなどが描かれている。“人が道を造り、道が人を造る”。

トレイル（歩き）というのは、登山人種からすればハイキングに毛が生えた程度のシロモノかも知れないが、太古からの種々の生物が遥かに歩いて来た道、大昔からの人類の思考と文明・文化が凝縮された道でもあろう。そのように考えれば、トレイルという魑魅魍魎の内面も見えてくるのではなかろうか。

岩崎晋也訳　エイアンドエフ　2018 年 5 月刊　本体 2,200 円

（酎、2018 年 10 月記）